信じる者は

なぜ救われるのか

some one

2026-05-18

信じる者はなぜ救われるのか

some one

2026-05-18

目次

01. 信じることの中身

02. 信じてもらえているという実感はどこから来るか

03. なぜ神なのか - 永遠という条件

04. 終端の犠牲 - キリストはなぜ一人でよかったのか

05. 感謝という言葉

06. 親鸞 - 悪人正機の構造

07. 知ることと社会の循環

08. 一神教の論理から、多元性へ

09. 神は誰を加護するのか

10. 神は他の神を認めるか

11. 神同士の相互承認から、人と人の相互承認へ

12. 多元性の中で、行いを吟味する

13. 価値はどこにあるか

14. 個人として

15. 闇と光

16. 結びに

「信じる者は救われる」という言葉は、どこか胡散臭いものとして耳にすることが多いと思います。茶化した文脈で使われたり、宗教的な押し付けとして退けられたり、信じない者は救われないという不公平の宣言として聞かれたり。

私もかつてそうでした。なぜ信じるかどうかで救いの有無が分かれるのか。信じる前にまず示してくれればいいのに、と思っていました。信じない人間を切り捨てる神なら、その神を信じる気にもならない、と。

ただ、長く考えた末に、この言葉の意味は逆方向にあると気づきました。

信じる者しか救えないのです。

これは神の側の制約ではなく、構造の問題です。誰かに信じてもらえているという実感は、自分がそう信じない限り、自分には届きません。これから書くのは、その構造についての話です。

ここで先にお断りしておくと、私はキリスト教徒として生まれたわけでも、特定の宗教の信徒でもありません。日本に生まれ、神棚があってその下に仏壇、その横にクリスマスツリーを飾るような、独特の文化圏で育ちました。

だから書いている内容は、特定の宗教の擁護でもなければ、教義の解説でもありません。「信じる」という行為そのものを構造として読み解いた時、何が見えるかという話です。一神教の論理を借りて始めますが、最終的には、特定の宗教を超えた地点まで歩いていきます。

最後まで読んでいただければ、なぜ信じる者しか救えないのか、その構造が見えるはずです。そしてその構造が見えた時、自分の信仰の有無に関係なく、何かが少し変わるかもしれません。

信じることの中身

ここで触れる信じる事というのは、相手の存在を認めることです。

「あなたを信じている」と誰かに言われた時、その言葉が伝えているのは「あなたという存在が、ここにあると私は認めている」というメッセージです。能力の評価ではありません。約束の保証でもありません。存在の認知です。

人が誰かに信じてもらえると安心するのは、自分の存在が他者から肯定されたからです。承認欲求という言葉がよく使われますが、根っこにあるのはもっと単純なことです。自分はここにいてもいい、という保証が欲しい。それを他者からの肯定によって得ようとしているだけです。

自分で自分を信じられると安心するのも、自己肯定が成立しているからです。自分で自分の存在を認めることができれば、他者からの肯定がなくてもある程度は立っていられます。

ただ、これは多くの人にとって難しい。自分のことが一番わからないというのは、ほとんどの人が抱える問題です。他人のことはよく見えるのに、自分のことはわからない。だから他者からの肯定を必要とします。

肯定は安心に繋がります。

そして、何の代償も求めずに相手を肯定する行為は、愛です。条件付きで「これができたら認める」という承認は、愛とは少し違います。条件付きの承認は、条件が満たされなくなった瞬間に消えます。それは契約に近いものです。無条件に相手を受け入れる行為こそが、最大の愛の表れです。

愛は全てを許容します。許容できなくなれば愛は消えます。

ただし、人間が全ての人を愛することはできません。全ての人を愛するためには、自分の全てを犠牲にしなければならないからです。

ここに人間の限界があります。私たちはどうしても、誰かを優先し、誰かを後回しにし、何かを大切にするために何かを犠牲にしながら生きています。意識しなくてもそうしています。これは罪ではな

く、生きるという行為の構造そのものです。生きるとは選ぶことであり、選ぶとは選ばないことを意味します。

人間が他者を完全に愛しきれないのは、人間が有限だからです。時間も力も愛も有限です。だから、無条件に全てを愛し続けることができる存在を必要とした時、人間は「永遠」という属性を持つ何かを想定する必要が出てきました。

その話は後でします。

信じてもらえているという実感はどこから来るか

ここからが本題です。

誰かが自分を信じてくれていることを、私たちはどうやって知るのでしょうか。

答えは一つしかありません。自分がそう信じるからです。

相手がどれだけ自分を信じていても、自分がそれを信じない限り、その事実は自分には届きません。逆に、相手が自分を信じていると自分が信じれば、その瞬間に「信じてもらえている」が自分の世界の中で成立します。

これは家族や友人との関係でも同じです。親があなたを愛していても、あなたがそれを信じられない時期があれば、その愛はあなたの世界には届きません。届いていないのに「愛されているはずだ」と頭で理解しても、心は安心しません。心を動かすのは、自分が信じることそのものです。

夫婦の関係でも、長年連れ添ったパートナーが「あなたを信じている」と言ってくれても、自分がその言葉を信じられない瞬間があれば、その言葉は届きません。逆に、はっきりと言葉にされていなくて

も、自分が「この人は信じてくれている」と信じることができれば、その瞬間に信頼関係は成立します。

　つまり、信頼関係というのは、双方が「相手は信じている」を信じる、という二重の構造で成立しています。片方だけが信じていても、もう片方が信じていなければ、関係は立ち上がりません。

　これは神に対しても同じです。

　神があなたを信じている、という命題は、あなたがそれを信じない限り、あなたの世界では発動しません。

　つまり、信じる者しか救えないというのは、信仰のテストや踏み絵の話ではなく、構造上の必然です。信じることが救われることの条件なのではなく、信じることが救われるという事象そのものを成立させる行為なのです。

　これに気づいた時、私は救いという言葉の意味が変わりました。救いは外から降ってくるものではなく、自分が信じることで自分の世界に立ち上がるものです。

なぜ神なのか - 永遠という条件

では、なぜ信じる対象が神でなければならないのでしょうか。家族でも、友人でも、誰かを信じればよいのではないか。

その通りです。家族や友人に信じてもらえると感じられる人は、それで十分かもしれません。それはとても幸せなことです。

ただ、現実の人間は永遠ではありません。家族は先に逝き、友人は離れていくこともあります。自分自身を信じる力が折れる時、最後に何が残るかという問題があります。

人が永遠を必要とするのは、有限の対象では「いつか裏切られるかもしれない」という不安が、信じることそのものを蝕むからです。

何かを信じるためには、その信じる行為を支える担保が必要です。誰かを信じる時、その人の過去の言動、人柄、関係の蓄積が担保になります。物を信じる時、その物の機能や歴史が担保になります。担保は、信じる行為を支える土台です。

ところが、人間が信じる対象として担保にできるものは、ほとんど全てが情報に依存しています。

ここで、リンゴの話をします。

あなたがリンゴを見て美味しそうだなと思ったところに、次々と情報が入ったとします。このリンゴは無農薬で作られています、と聞けば価値は上がります。しかしこのリンゴは産地偽装の疑いがあります、と聞けば価値は下がります。

最初からそのリンゴは物質的にはなんら変わりません。それでも、情報によって価値や認識は次々と変化させていってしまうのです。

物の価値も、人の評判も、自分自身の価値さえも、外部の情報に支配されて揺れ動きます。情報を担保にしている限り、新しい情報が来るたびに、価値は再計算されます。

そういう不安定な世界の中で、揺れない担保があるとしたら、それは「永遠」という属性を持つものだけです。

神という概念が機能してきたのは、神が永遠だからです。永遠であるからこそ、永遠に信じてくれるという命題が成立し得ます。

居るか居ないかという問いは、ここでは少しずれます。永遠の存在として信じることが可能な対象、それを神と呼んでいる、という順序の方が実態に近いのです。神は実体の有無で語るべきものではなく、永遠という属性を持つ対象として機能するものとして語るべきものです。

無神論の立場からすれば、これは詭弁に見えるかもしれません。実体がないのに機能するというのは、矛盾しているように聞こえる。ただ、実体のないものが機能している例は、世界に無数にあります。お金は紙ですが、機能としては経済を動かしています。法律は文字ですが、機能としては社会を秩序立てています。神も、実体の有無で語るのではなく、機能として語るべきものです。永遠という属性を担保にした信じる対象として機能する限り、神は人間の心の中で確かに働きます。

そして、その機能を一度受け入れると、神は永遠にあなたを信じ続けます。あなたが神を信じる限り、神はあなたを信じます。仮にあなたが神を忘れていても、神は構造として、永遠の存在としてあなたを信じています。

終端の牲 - キリストはなぜ一人でよかったのか

ここで、キリスト教の中心にある一つの出来事について触れます。

キリストは全ての人の罪を背負って自分の命を絶たれました。これは標準的に「代償的贖罪」と呼ばれ、神が人類の罪を引き受けるために犠牲を要求した、という物語として語られることが多いです。

しかし私は別の読み方をしています。

神が一度、全ての人の罪を背負って自身を犠牲にしたということは、それ以上の犠牲は必要ないということです。神は犠牲の経済を閉じる終端として、一度だけ、自分自身を差し出した。

だから神はもう誰の犠牲も求めません。

> キリストは、すべての人のあがないの代価として、ご自身をお与えになりました。 テモテへの手紙一 2:6

神からすれば、犠牲の元にしか成り立たないこの世界からの犠牲は、もう十分です。

神が自身を犠牲にされたのは、すべての人を愛していると伝えるためであって、「私のようにあなたも犠牲になりなさい」というメッセージではありません。

それは決して、自分を犠牲にしろという教えではないのです。あなたがどれだけ自分を犠牲にしたとしても、あなたは何かを犠牲にしなければ生きていけない生き物です。神はそのことを知った上で、自身が終端を引き受けたのです。

「もう犠牲は十分です」というメッセージとして読み替えると、十字架の意味は反転します。これがキリスト一人で十分である理由です。世界に犠牲の終端がただ一つあれば、その世界は閉じる。複数あったら閉じない。だから神は一人でよかったのです。

ではなぜ神は誰の犠牲も求めないのか。

それは、全てが神の子だからです。

もしこの世界が神によって創造されたとするなら、この世界の全てが神の創造物であり、全ての人が神の子です。神は自分自身の子に犠牲を求めてはいません。

もし神が何かを求めるとすれば、それは犠牲ではなく、感謝の気持ちです。

感謝という言葉

愛は感情です。実体がありません。

感情は心に思っているだけでは、相手には届きにくい。届いていないものは、二人の関係の中ではないことに近くなります。

ただし、感情は行動にも現れます。誰かを大切に思っていれば、その気持ちは態度や選択や日々の小さな振る舞いに滲み出ます。長く近くにいる相手であれば、言葉にしなくても感謝が伝わることはあります。

問題は、行動だけでは伝わらない場面があるということです。距離がある時、関係が短い時、誤解が生まれている時、相手が不安を抱えている時。そういう場面では、言葉にして初めて感情は形を持ち、相手に届きます。

感謝は心に持っているだけで終わらせず、状況に応じて行動か言葉のどちらかで外に出す必要がある、ということです。届け方を選ぶ判断が要る。

そこで人間は言葉を作りました。感謝の言葉は、心の中の動きを形にして、相手に届ける道具です。

インドネシア語の「ありがとう」はTerima kasih（テリマカシ）と言います。Terimaは「受け取る」、Kasihは「愛」。直訳すると「愛を受け取りました」になります。

この言葉を作った人々は、相手の厚意が愛から来ていることを知っています。そして、自分がその愛を受け取ったことを言葉にして返すことで、愛の感情が二人の間で共有されるという構造も知っています。

文字として残れば、書いた人がもう生きていなくても、感情は届き続けます。これは人類が言葉を作った最も大きな成果の一つです。

ここで先ほどの神の話に戻ります。神に感謝するということは、神が自身を犠牲にしたことに感謝することと同時に、世界の全ての犠牲に感謝することと同意です。世界が神によって創られたのなら、世界の全てに感謝することと、神に感謝することは同じになります。

全ての人が全ての人に感謝できれば、感謝は必ず自分に回ってきます。世の中の幸も不幸も、結局は自分の身近なところで起こります。隣人に親切にすること、感謝することで、自分の世界に良い流れを生むことは可能です。

　このテリマカシという言葉が二人の間で愛を循環させるという構造は、後でまた出てきます。これが社会全体に拡張された時、感謝は世界の循環を動かす潤滑油になります。

親鸞 - 人正機の構造

　善人なおもて往生す いわんや悪人をや 親鸞

　現代語にすれば「善人でさえ往生できるのだから、まして悪人が往生できないはずがない」という意味になります。

　親鸞のこの言葉は、救いを「資格」の問題から「構造」の問題に転換した瞬間の言葉だと思っています。

　ここでいう善人と悪人は、道徳的な意味での善悪ではありません。

　善人とは、自分の善い行いによって自分は救われると思っている人のことです。自分には自分を救う力がある、という前提に立っている人。

　悪人とは、自分の力では自分を救えないと自覚している人のことです。真っ当に生きられない苦しみの中にいる人。自分には自分を救う力がない、と知っている人。

　親鸞の議論の核は、ここから先の構造にあります。

　仏教の根本教義に、諸法無我と縁起という考え方があります。あらゆる存在には固定的な自己というものはなく、全ては他との関係の中で生起している、という考え方です。自分というものは、他者との関

係、環境との関係、過去との関係、その総和として一時的に立ち上がっているだけで、独立した実体としての自己は存在しない。

この前提に立つと、「自分の力で救われる」という発想そのものが、根本的に間違っていることになります。なぜなら、独立した自己というものが存在しないところで、その自己の力で何かを成し遂げるという物語は、最初から成立しないからです。

善人は、自分には救う力があると思っているがゆえに、この根本的な無明から離れられません。自我への執着が強い。

悪人は、自分には救う力がないと自覚しているがゆえに、自我への執着から強制的に引き剥がされています。

つまり、悪人の方が、無我の真実に近い場所にいるのです。

他力本願というのは、自分の力ではどうにもならないと諦めて他者にすがる、という消極的な意味ではありません。自我というものがそもそも実体ではない、という根本的な認識に立った時、頼れるのは自分以外の何かしかない、ということに気づく。それが他力です。

悪人は、苦しみの中で、すでに無我の構造に直面しています。真っ当に生きられない苦しみを抱えていること、それは自力の限界を体ごと知っているということで、仏教の根本教義に体ごと触れている状態です。だからこそ救いの本来の対象になります。

ここまで書いてきた一神教の論理 - 信じる者しか救えない、神を信じる限り神は信じてくれる - と、この悪人正機説は、別々の宗教の話のようでいて、構造的には繋がっています。

両者に共通しているのは、自分の力で自分を救おうとする発想を一度手放さないと、救いは始まらない、ということです。一神教では、それを「神を信じる」という形で表現します。仏教では、それを「自我を手放す」という形で表現します。表現は違いますが、構造としては同じものを指しています。

知ることと社の循環

ここで、もう一つ重要な概念を入れます。

知ることは、自分の世界の形を変える行為です。

何かを知ると、その瞬間に自分の世界は前とは違う形になります。知る前の世界には戻れません。これは情報を一つ追加するという話ではなく、世界の見え方そのものが変わるという話です。

先ほどのリンゴを思い出してください。リンゴそのものは変わっていないのに、情報が入ることで認識が変わっていきました。あれは情報の不安定さの例として出しましたが、別の見方をすれば、知ることが世界の形を変えるという現象の例でもあります。

そして、自分が誰かに何かを教えることは、その誰かの世界の形を変える行為です。

これは大きなことです。私たちは、誰かと関わるたびに、互いの世界の形を変えています。意識していなくても、そうしています。

中国語では「知っている、わかる」を「知道」と書きます。文字通り読めば「道を知る」です。知ることは、道を歩くことに似ています。何度も同じ道を歩いて初めて、知識は変化していきます。一度や二度では「不知道」、知らないと同じ状態です。

知ることが世界の形を変える、それを繰り返すことで世界の形が定着していく、というのが知道の本質だと思います。だから信仰も同じで、信じるという心の動きを、道を歩くように繰り返すことで、信仰は形になっていきます。

ここから、社会の話になります。

人間は一人では生きていけません。生まれた瞬間から誰かに育てられ、生きていく上で誰かと関わり続けます。自分という存在は、他者との関係の中でしか成立しません。これは先ほどの諸法無我・縁起の話と同じ構造です。

人間が他者との関係の中でしか存在しないのなら、感謝も行いも、社会システムを循環させるための機能として必然的に必要になります。誰かが誰かに親切にする。受け取った側が感謝を返す。その循環が止まれば、社会は持ちません。これは道徳の話ではなく、システムの話です。

世界の主要な宗教には、信仰と行いの両方を重んじるという共通点があります。なぜどの宗教も行いを重んじるのか。それは、宗教が信仰の場であると同時に、人間的な教育の場でもあったからです。何が正しい振る舞いか、何が他者を傷つけるか、何が共同体を保つか、これらを世代を超えて伝える機能を、宗教が担ってきました。

別の言い方をすれば、宗教というのは、社会システムを心で動かすためのベースにあるOSです。法律はその上で動くアプリケーションのようなものです。アプリケーションがどれだけ高機能でも、OSが壊れていれば全体は動きません。法律で人を縛るのとは違う方法で、宗教は人を内側から育てます。効率で言えば法律の方が早い。でも、心が育っていない社会は、法律だけでは持ちません。法律の網の目から漏れた部分で、人は人を傷つけ、人は人に親切にします。その部分を支えるのが、宗教の教育的な役割でした。

各宗教が掲げる「隣人を愛せ」という共通の教えも、ここに収斂します。

> あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。 マタイによる福音書 22:39

> そして、両親に親切であれ。親族、孤児、貧者、近隣の者、遠隣の者、友に、旅人にも。 クルアーン 4:36

> 他人を傷つけない人、心の静かな人、そのような人は心の安らぎを得る。 ダンマパダ 15:197

宗教ごとに表現は違いますが、隣人への配慮を中心に置く点で全て一致しています。これは偶然ではなく、社会システムが循環するためには、各人が身近な他者を大切にすることが必然的に必要だからです。

ここで、先ほどのテリマカシを思い出してください。「愛を受け取りました」という言葉が、二人の間で愛を循環させる、という構造でした。これが社会全体に拡張されたものが、感謝という潤滑油です。

社会という大きな機械は、それぞれの人と人との小さな関係の連鎖でできています。その小さな関係の一つ一つに、感謝が一滴ずつ差されることで、機械は摩擦なく動きます。感謝が枯れた関係は、ぎしぎしと音を立て始めます。社会全体で見れば、感謝の総量がそのまま、社会の動きの滑らかさを決めています。

なぜ感謝が必要なのか。それは、人間は常に何かを犠牲にしなければならない生き物だからです。誰かが食べるものは、別の何かの命でした。誰かが着るものは、誰かの労働でした。誰かが住む家は、誰かが切り出した木でした。私たちは、無数の犠牲の上に立って生きています。その犠牲を犠牲のままで終わらせず、感謝として循環に戻すことで、初めて関係は持続します。感謝のない関係では、犠牲は一方通行のままで、いつか枯れます。

縁起と因果という考え方は、全てが繋がっているということを教えてくれます。ただし、全てが繋がっているということは、必ずしも全てが近くにあるべきだ、という意味ではありません。

距離を置くこともまた、調和の一つです。

近すぎると、互いの世界の形を変えすぎてしまうことがあります。お互いを信じているからこそ、適切な距離を取ることもまた、相手の世界を尊重する形です。全てが繋がっているからこそ、全部が近くにある必要はない、ということです。

世界全体に対して何かをすることはできません。しかし、自分の隣人に親切にすることはできます。それが、自分の世界の中で信仰を行いに変える唯一の方法であり、社会システムを下から支える行為でもあります。

教えの核心は、隣人を愛せ、感謝せよ、という社会循環の機能要件です。これは時代を超えて変わらない部分です。一方で、教えがその時代の社会通念を吸収して変質する部分もあります。行いの正しさをどう吟味するか、という問いについては、後の章で改めて扱います。

一神教の論理から、多元性へ

ここで一つ、大きな飛躍をします。

ここまで書いてきた構造は、一神教の中でも、仏教の中でも成立する論理でした。信じる対象には永遠性が必要、神は犠牲の終端、感謝は社会循環の潤滑油、自我への執着を手放した者ほど救いに近い。

しかし、世界は多様です。神は一人ではなく、仏もいて、八百万もいて、何も信じない人もいます。

ではこの多元性をどう扱うのか。

ここから先は、一神教の枠組みの内側から、多元性が必然的に導かれることを示していきます。

神は誰を加護するのか

ここまで書いてきた論理を整理します。神を信じる者を、神は信じる。神を信じる者には、神の加護がある。これが基本構造でした。

ここから、もう一歩進めます。

神はすべての人を信じています。そうであるならば、神はすべての人を加護しています。これは、神の本性として導かれる帰結です。すべてを愛し、すべてを許容する存在が、特定の誰かだけを加護することはあり得ないからです。

その上で、加護される願いがあるとすれば、それは「誰かの幸せを願う」という心の動きです。誰かのためを思い、誰かの幸せを願う者を、神が加護しない理由は一つもありません。それが神という存在の本性に最も近い心の動きだからです。

ただし、ここで重要な区別があります。

神が加護するのは「願い」という心の動きそのものであって、その願いを実現するための「行い」を肯定しているわけではありません。誰かの幸せを願って間違った行いをした人がいた時、その人の願いは加護されても、行いは別の次元で吟味されます。

ここで、先ほど社会循環の章で書いたことを思い出してください。行いは、社会システムを動かす機能要件として、隣人愛や感謝という形で吟味されるものでした。願いは神が加護しますが、行いはこの社会循環の機能要件に照らして、別途検証される必要があります。

加護と肯定は違います。神の加護を理由に、自分の行いを正当化することはできません。願いが純粋であっても、行いが他者を傷つける構造を持つなら、その行いは是正される必要があります。

神は他の神を認めるか

ここから、本題に入ります。

もし神という存在があるとすれば、その神は、別の宗教の神を認めないのでしょうか。一神教だからといって、神はアラーを認めないのでしょうか。仏を、八百万の神々を認めないのでしょうか。

この問いに、ここまでの論理から答えが導かれます。

別の宗教の神も、誰かの幸せを願っているなら、その神は神の本性に最も近い心の動きを持っています。であるならば、頂点にある神が、その神を加護しない理由は一つもありません。認めない理由もありません。

これは妥協ではなく、必然です。一神教の論理を厳密に辿っていけば、神は他の神を認めざるを得ない。なぜなら、神はすべてを加護する存在であり、誰かの幸せを願う者を加護しない理由を持たないからです。他の宗教の神も、その神を信じる人々の幸せを願っている。であれば、その神は加護される。

逆に、神が他の神を認めないとしたら、その神は神の本性から外れていることになります。すべてを加護するはずの存在が、特定の信仰だけを加護するというのは、論理として成立しません。

つまり、一神教の論理を真摯に辿る者は、必然的に、他の宗教の神を認めざるを得ない地点に到達します。

歴史上、宗教戦争が絶えなかったのは、この論理を最後まで辿らなかったからです。「自分の神は本物で、相手の神は偽物」という命題は、神の本性に立ち返れば成立しません。神がすべてを加護するなら、相手の神もまた加護されている。本物と偽物の判定は、神の本性に反する人間側の操作です。

神同士の相互承認から、人と人の相互承認へ

神が他の神を認めるなら、神を信じる人もまた、他者の神を認めるべきです。

そしてここから、個人の主観と多様性を認めることに繋がっていきます。

世界には、それぞれの主観があり、それぞれの世界があります。あなたが神を信じれば、あなたの世界に神は存在します。あなたが仏を信じれば、あなたの世界に仏は存在します。何も信じなければ、あなたの世界には信仰の対象は存在しません。それぞれの世界は、それぞれの主観の中で成立しています。

人間の数だけ、世界が存在します。それは、たとえ信仰が同じだとしても、同じ宗教を信じる人同士でもです。同じ教会に通う二人がいても、その二人が信じている神は、厳密には別の神です。なぜなら、それぞれの主観の中で立ち上がっている神だからです。同じ書物を読んでも、解釈は人の数だけあるのと同じです。

そうであるならば、必要なのは二つのことです。

自分の世界を信じること。誰かの世界を信じること。

自分の世界を信じることは、自分の神 - それが何であれ - を信じることです。誰かの世界を信じることは、その人の神を信じることです。誰かの神を信じるとは、その人がその神を信じていることを尊重し、その人の世界の成立を否定しないということです。

自分の世界を信じることができるからこそ、誰かの世界を信じることができます。逆ではありません。まず自分の世界を立ち上げる。その上で、同じ仕組みで他者の世界も立ち上がっていることを認める。この順序です。

これは寛容ではなく、構造の話です。神同士が互いを認めるという論理が成立する以上、それを信じる人々もまた、互いの信仰を認めることになります。あなたの世界が成立する仕組みと、相手の世界が成立する仕組みは、同じ再帰構造で動いています。あなたが自分の神を信じることで世界が立ち上がるのと同じ仕組みで、相手も自分の神を信じることで世界を立ち上げています。

多元性の中で、行いを吟味する

ただし、他者の世界を認めることは、その世界に含まれる不正を見過ごすことではありません。

ここで、先ほどの「願いと行い」の区別が、再び重要になります。

ある宗教の中で、特定の人々を不当に苦しめる構造が、教えとして組み込まれている場合があります。歴史的にも現在も、そのような例は存在します。それを信じる人々の願いは加護されますが、その行いは、社会循環の機能要件に照らして吟味される必要があります。

宗教の教え自体が、時に間違いを含むことがあります。教えは時代を超えて伝わる過程で、その時代の社会通念を吸収します。奴隷制を容認した時期も、女性差別を容認した時期も、各宗教にありました。これは認めなければなりません。そして現在も、特定の身分制度を正当化する宗教的論理が、人々を苦しめている場所があります。

教えの核心と、時代に汚染された部分は、分けて考える必要があります。教えの核心は、隣人を愛せ、感謝せよ、という社会循環の機能要件です。これは普遍です。一方で、特定の集団を従属させる構造や、特定の身分を固定する論理は、教えの核心ではなく、時代の権力構造が宗教の中に流れ込んだ結果です。

他者の世界を信じることは、その世界の中で生きる人の主観を尊重することであって、その世界に含まれる不正な構造まで肯定することではありません。願いを加護しても、行いを肯定しないという神の構造と、同じ論理がここにも適用されます。

そして、先ほどの「距離を置くこともまた調和」という話は、ここにも繋がります。他者の世界を信じるということは、必ずしも他者の世界に踏み込むことではありません。相手の世界の存在を認めた上で、適切な距離を取ること。それも信じることの一つの形です。同時に、その距離は、不正に対する沈黙ではない。距離を取りながらも、行いの誤りには声を上げる。これが、多元性を認めながら不正を見過ごさない立場です。

価値はどこにあるか

人生の価値は、点数で測れるものでも、誰かが用意した正解と一致するものでもありません。

Happiness depends upon ourselves. アリストテレス

幸福は自分自身に依る、という言葉です。これは紀元前の言葉ですが、今でも変わりません。

外部の情報による価値基準に依存していると、自分の価値は揺れ続けます。情報が変わるたびに自分の価値が揺らぐような生き方は、本質から離れていきます。

ここで、もう一度リンゴを思い出してください。リンゴそのものは変わっていないのに、情報によって価値が変わっていきました。あれと同じことが、私たち自身にも起こっています。

SNS のフォロワー数、いいねの数、年収、肩書き、外見の評価、これら全てが情報として絶え間なく自分に流れ込み、その都度、自分の価値の感覚を揺らします。揺れること自体は構造上避けられません。問題は、揺れた時に、何を担保にして自分の価値を立て直すかです。

情報を担保にしている限り、新しい情報が来るたびに価値は再計算されます。そういう生き方では、心は休まりません。

　しかし、神という永遠を担保にすれば、自分が自分の価値を見失った時にも、揺れない一点が残ります。神を信じることが、自分の存在を信じる最後の支えになります。これは比喩ではなく、構造としてそうなのです。

　人は死ぬと、肉体も含めて全てを手放します。どれだけ集めたものも、どれだけ築いた地位も、最後には全て手放すことになります。手放さずに残るのは、心だけです。

　もし自分自身の中に最後まで残るものがあるとすれば、それは自分の心だけです。そして、その心を育てるのは、自分自身の行いです。先ほどの章で、行いは社会の循環を支えると書きました。しかし行いにはもう一つの作用があります。同じ行いが、外には循環を生み、内には自分の心を育てる。これは別々の作用ではなく、一つの行為の表と裏です。

　最後の時に自分の人生を振り返る時間があったとしたら、何をどれくらい集めて、どんな暮らしをしたとしても、それを幸せだったかどうか判断するのは、自分自身の心以外にありません。財産があったから幸せだったとは、自分の心が思わないかもしれません。逆に、財産はなかったが人との関係に恵まれていたから幸せだった、と心が判断するかもしれません。判定権は、最後まで自分の心にあります。

心を育てることが、自分が生きた唯一の証です。それを証だと認識できるのも、自分の心です。

信仰とは、この心を育てるための営みでもあります。教義を知ることでも、儀式を行うことでもなく、心を育てるという日々の作業の中で、信仰は形を持ち始めます。

個人として

ここまで構造の話をしてきましたが、最後に個人の話を書きます。

私は多くの間違いをしてきました。謝っても謝りきれない人がたくさんいます。誰よりも悪いことをたくさんしてきました。

悪いことはしても、誰かを悲しませることは絶対にしてはいけない、というのは父の教えでした。しかし誰かを悲しませない悪いことというものは、ほとんどありません。だから私の人生は、その教えとの距離の取り方の連続でした。

父は私が高校生の時に、突然亡くなりました。それ以来、父の教えは私の中で時間を止めたまま、繰り返し参照される基準点になっています。父はもうこの世にいませんが、父の言葉は、私の中で機能し続けています。これも構造としては、神という永遠の対象と似ています。実体としての父はもういない。それでも、私が父を信じている限り、父は私の世界の中で生き続け、私を信じ続けます。これが永遠の意味の一つです。

一度、何も信じられなくなった時期がありました。誰にも信じてもらえないと感じ、自分も誰のことも信じられなくなり、自分自身を信じることもできなくなりました。

その時に初めて、信じることが先で、信じてもらえる実感は後だ、という構造が見えました。最初に信じることをやめてしまうと、信じてもらえている実感はもう手に入らないのです。誰かに信じてほしいと願う前に、まず自分が誰かを信じることが、信じてもらえる世界を立ち上げる起点なのだと。

これは順番の問題です。多くの人は逆だと思っています。誰かに信じてもらえてから、自分も信じる、という順番で関係を考えます。しかしその順番では、関係は永遠に始まりません。誰かが先に信じることをしないと、関係は立ち上がらないからです。

最初の一歩は、自分が踏み出すしかありません。

そのことに気づくのに、私は長くかかりました。

神を信じるという行為は、最後の砦です。家族にも友人にも信じてもらえないと感じる時、自分自身さえ信じられない時、それでも信じることをやめないために、永遠の対象が必要になります。神を信じる限り、神は自分を信じます。これは構造的に成立する命題です。

そしてここで、忘れてはならないことがあります。世界には、不幸な境遇ゆえに「信じられるのは神しかいない」という場所に立たされている人が、多く存在しています。家族を失った人、戦火の中にいる人、迫害を受けている人、病に苦しむ人、社会から切り離された人。

その人たちにとって、神を信じるという行為は、知的な議論ではなく、今日を生きるための支えです。

神という概念が長い歴史の中で消えなかったのは、こうした人々の最後の支えとして機能してきたからです。哲学的に神の存在を証明できるかどうかは、本質的な問題ではありません。神を必要としている人がいて、その人たちにとって神が確かに機能している、という事実が、神という概念の本当の根拠です。

それが、神という概念が人類にもたらした最も大きな救いです。

そしてこの構造は、神を信じない人にも応用が効きます。何かを信じる、最初の一歩を自分から踏み出す、という行為そのものが、自分の世界を立ち上げる起点であるという構造は、信仰の有無に関係なく成立します。神を信じる必要はありません。何かを信じる、それだけで十分です。

闇と光

光が大きければ大きいほど、大きな闇が生まれます。

光を遮る時、その闇は近いほど濃くなります。

力が大きくなれば、作用も反作用も大きくなる。

世界には常に光と闇があります。一方だけを取り出すことはできません。光だけの世界を望むことは、闇を見ないことに過ぎず、それは結局、光も見ていないことと同じです。

> 光が無限であれば、闇もまた無限。 無限の光で照らせばいい。 忘却は永遠の光。

闇は恐れを生み、不安や憎悪は自分の心から湧き起こります。それを打ち払うのは信じる心です。迷ったら、友として正しき道を選べばよい。得るを見ては義を思うこと。誰かを苦しめてはならないこと。

一番傷つけている人の気持ちが、一番見えません。だから、その気持ちを伝えるのは一番難しい。その人は、自分の反対側にいるからです。自分の影の側にいる相手は、見えない。だから無意識に傷つけてしまう。気づいた時にはもう遅いことが多い。

人間には誰でも魔が刺す時があります。気づかないうちに大切な人を傷つけてしまうこともあります。それでも、感謝と信じる心を絶やさないでいられるかどうか。

過ちを犯さない人間はいません。信じるという行為は、その過ちも含めて相手を信じるということです。

愛は許容です。許容できなくなれば愛は消えます。

ただし、許容することと、何でも肯定することは違います。間違いは間違いとして指摘し、それでも相手の存在を信じ続ける。これが愛の難しさです。

全ての情には愛が含まれています。怒りも嫉妬も悲しみも、その根には愛があります。愛がなければ、怒りも嫉妬も生まれません。だから感情を真に愛することができれば、その感情はその時に報われます。

否定する必要はないのです。

受け止める、それだけで感情は変わっていきます。

結びに

この世界は多様です。人の数だけ世界があり、人の数だけ神の形があります。

自分の世界を信じること。誰かの世界を信じること。

それぞれの世界には、それぞれの愛があります。それぞれの感謝の表現があります。それぞれの神があります。

選択肢は無限大です。

可能も無限です。

世界はひとつの愛から生まれてきました。あなたがそれを信じれば、あなたの世界も愛から始まります。

全ての人に、全ての人を照らすことが可能な範囲があります。だから全ての人が必要です。大きな光の中では小さな光は見えず、暗闇の中では大きな光は眩しすぎます。誰かが、誰かの光になります。

あなたが照らせる範囲は、あなたにしか照らせない範囲です。世界全体を照らす必要はありません。あなたの隣にいる人を、あなたが照らせば、それで十分です。それが連鎖していけば、世界は自然と明るくなっていきます。

最後まで読んでくださり、ありがとうございました。それは、あなたがいてくれたからです。

我思う、ゆえに我あり他思う、ゆえに我あり

entrance to the new world

奥付

書名：信じる者はなぜ救われるのか

著者：some one

公開日：2026-05-18

言語：日本語

本ファイルは Internet Archive 公開用に、PDF / TXT / EPUB / Markdown / DOCX へ展開した保存版です。